

## 令和5年度 県高文祭『文芸作品集』

令和5年11月10日(金)～11月12日(日)に、県民会館1F 美術館前ロビーで、文芸作品展の展示を行いました。県内の高校生のみなさんから募った文芸作品(散文13篇、詩15篇、短歌23首、俳句29句)の中から、各部門の入賞作品と、4校(高岡第一、富山東、南砺福野、富山中部)の部誌の展示を行いました。

また、9月16日(土)～17日(日)には、富山県教育文化会館を会場として、第23回北信越高校生文芸道場を開催しました。県内外から約80名の高校生が参加し、生徒交流会や散文・詩・短歌・俳句の各部門に分かれての部門別研修会を行いました。生徒同士で作品の批評を行ったり、講師の先生からご指導をいただいたりして、文芸交流の輪を広げる貴重な機会となりました。

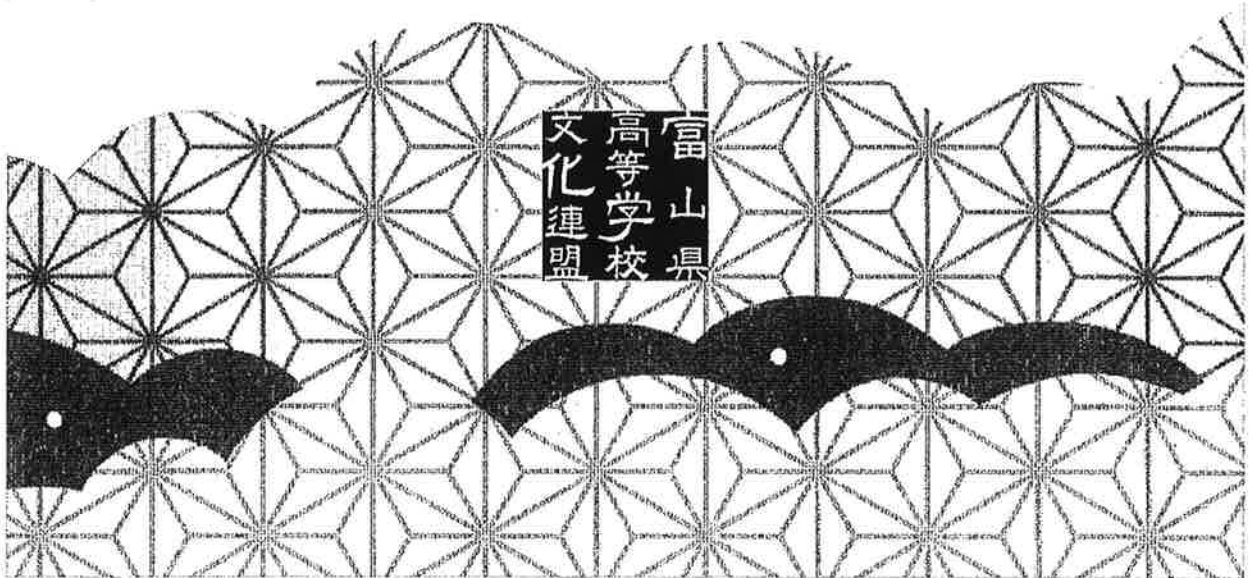
ここでは、今年度の県高文祭の折に発行した『文芸作品集』の中から以下のものを掲載します。

- 発刊の言葉
- 部誌部門 優秀作品、参加作品
- 散文部門 入賞作品
- 詩部門 入賞作品
- 短歌部門 入賞作品
- 俳句部門 入賞作品
- 編集後記



# 文芸作品集

令和五年度 県高文祭参加



富山県  
高等学校  
文化連盟

# □ 発刊のことば □

## 言葉のチカラ

富山県高等学校文化連盟 文芸専門部

部会長 日下 泰夫

「僕らは、今日超えるために、トップになるために来たので、今日1日だけは彼らへの憧れを捨てて勝つことだけ考えていきましょう。さあ行こう！」

これは、WBCにおいて投打二刀流で活躍し、日本を3大会ぶりの優勝に導いた大谷翔平選手の決勝の試合直前の言葉です。大リーグのスター選手ばかりのアメリカとの決勝に臨むチームメートを鼓舞する一言。プレーだけでなく、さまざまな言葉でもチームを引っ張りました。

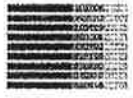
「人生は敗者復活戦」

仙台育英学園高校野球部監督の座右の銘です。これは、負けても諦めずに再チャレンジすることが大切だというメッセージが込められています。彼自身が選手や学生コーチとして多くの挫折を経験したことから生まれた言葉です。失敗から学ぶことや、成長することを大切にする姿勢が感じられます。

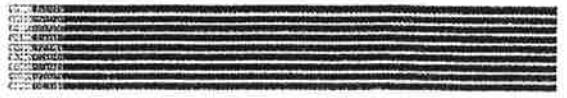
今年は3月のWBCに始まり、夏の甲子園、バスケットボールワールドカップ・アジア大会・ラグビーワールドカップ等、印象的な大会が多い年だったと思います。その中から心に残った言葉を2つ挙げてみました。コミュニケーションをはかる最大の手段は言葉だと改めて感じました。特に日本語は言葉が持つ幅、奥行き、濃密さは他の言語に例をみないものだろうと思います。しかし、言葉選びや使い方を怠ると、日本語の持つ「言外の意味」や「行間のニュアンス」が失われてしまいます。

人に情報や考えを伝える手段としての「言葉」や、いろいろな音楽に込められた「歌詞」は、言葉の羅列ではなく、人それぞれ、言葉や歌詞が発せられた状況や作者の思いによって違った意味を持ち、その心を伝えるものだと思います。さらに、親や先輩・友人がかけてくれた一言、夢や希望、情熱を与えてくれる歌詞など、何気ない言葉が、時に大勢の人を感動させ、勇気づけ、喜ばせたり、落ち着かせてくれたりもします。

この文芸作品集に掲載されている県内高校文芸部のみなさんの散文・詩・短歌・俳句に込められた熱い想いに触れたとき、感動と同時に、言葉の持つ重さと重要性、そして「チカラ」を実感することができました。これからも自己の感性を磨き、豊かな発想力と表現力で、言葉に命を吹き込み、人の魂に響く作品を作り続けてくれることを願っています。

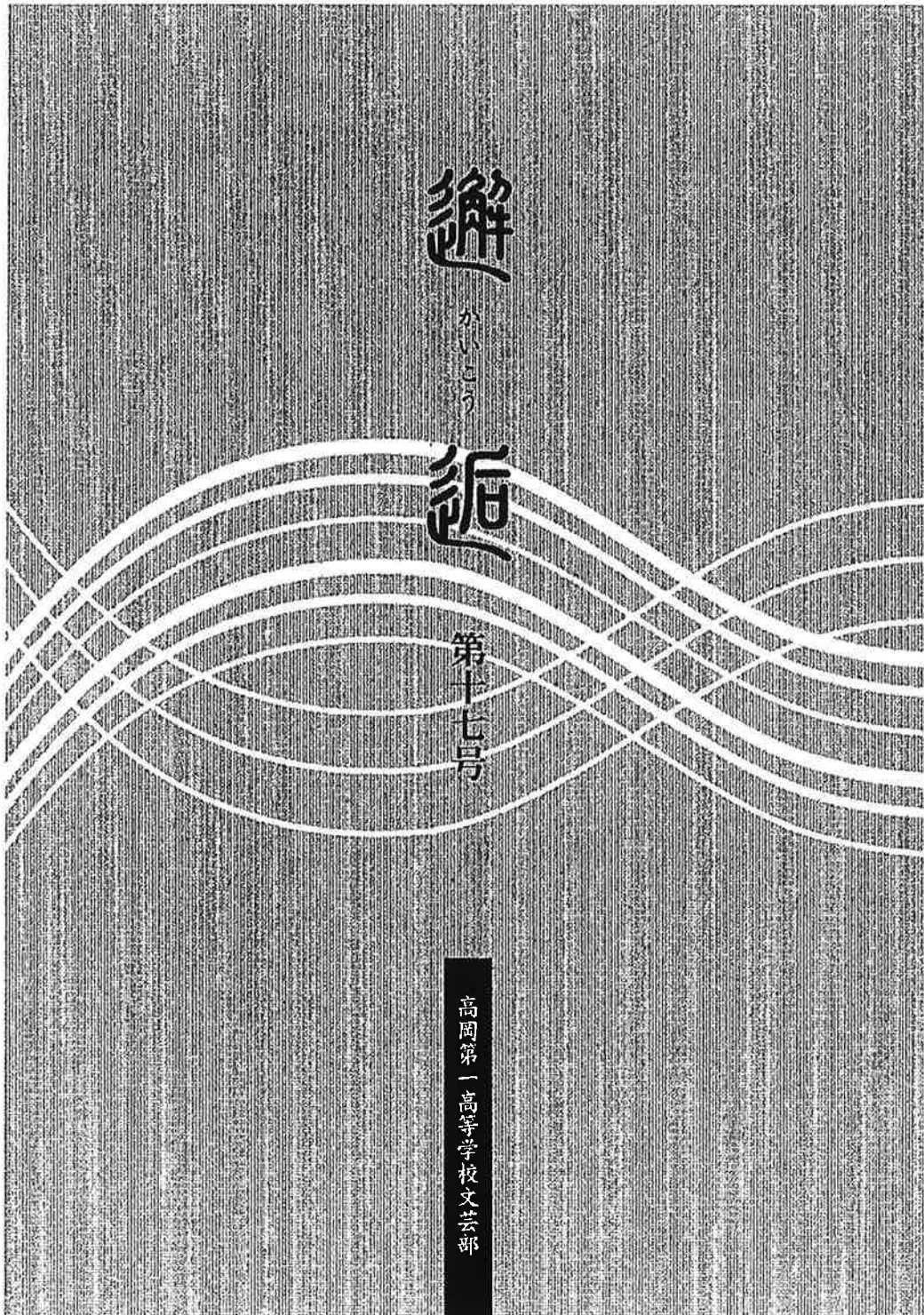


# □ 部 誌 部 門 □



## 【優秀賞】

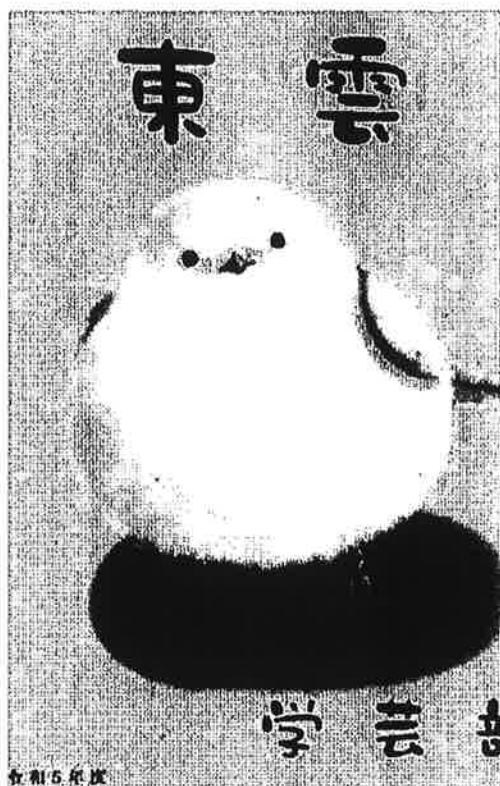
高岡第一高等学校 『邂逅 第十七号』



## 【参加作品】

富山東高等学校

『東雲 shinonome』



富山中部高等学校

『双輪 第一三四号』



南砺福野高等学校  
『プロムナードX』



# □ 散 文 部 門 □

【最優秀賞】	富山中部高等学校	2年	稲垣英里	熱と蕾……………	6
【優秀賞】	富山東高等学校	2年	氷見美南萌	明日の世界……………	9
	富山南高等学校	2年	前田拓海	徒花と涙……………	10
【佳 作】	高岡南高等学校	2年	蔵野美琴	怪我の功名……………	13
	高岡南高等学校	1年	藤川紗矢香	香跡……………	15
	南砺福野高等学校	1年	西川朋花	ナイトダンサー……………	17
【参加作品】	富山南高等学校	1年	中松千颯	ステレオタイプの彼女……………	19
	富山中部高等学校	1年	前川拓人	少女とお人形の画策……………	20
	富山第一高等学校	1年	稲坂愛里	君のレシピ……………	22
	富山第一高等学校	1年	糺陽翔	巨鯨の星……………	23
	富山第一高等学校	1年	田上泰成	七億円当たっただけなのに……………	24
	高岡第一高等学校	2年	上田佳音	踏切の向こう……………	26
	富山高等専門学校	1年	植村春城	小説読むくらいならゲームするよね。…	27

【最優秀賞】

熱と蕾

富山中部高等学校 二年

稲垣英里

始まりは、入学直後の桜が散りかけていた頃だった。ある日、廊下に掲示された各部活の勧誘チラシの中に、俺は軽音楽部のもを見つけた。新人生徒歓迎という名目で、ライブも行うらしい。オープンハイスクールでその存在は知っていたが、正直に言ってもあまり良い印象は無かった。絵に描いたようなキラキラした青春、という感じがして、近寄りたかった。

その日の放課後、俺は目当ての部活を一通り見学し終え、家に帰ろうとしていた。下駄箱から靴を取り出したそのとき、かなり盛り上がりつつある様子の拍手が響いてきた。何かと思えば、例の軽音楽部のライブの最中だった。校舎にぐるりと囲まれた中庭のウッドデッキをステージにして、四人の部員が楽器と共に立っている。彼らの目の前にも生徒は集まっていたが、周囲の校舎の窓から覗いている方が数は多そうだった。

一曲終わったところらしく、「ありがとう」とボーカルが爽やかな笑顔で言い、女子生徒たちが歓声を上げる。こういうノリを実際に見ると、なかなか居心地が悪いものだ。随分と黄色い歓声を浴びているが、本当にすばらしいライブなのだろうか。少しばかりの嫉妬と好奇心に従って、ちよとど始まった曲を聴いていくことにした。

手近な窓の傍に寄ると、観客をばさんでバンドメンバーと正対する位置になった。俺の周りにいる生徒を見ると、上級生も多いことに気づいた。メンバーの友達も来ているのだろう。歌は結構上手かった。おさなりな手拍子をしていると一番が終わわり、間奏に入ったところで、ボーカルがスタンドマイクに声を張った。

「実は、スペシャルゲストに来てもらってます」

観客が目を見合わせ、ボーカルは中庭に面した廊下の引き戸を指し示す。そこから小柄な男子生徒がステージに上がった途端、上級生を中心に大きなどよめきが起った。あまり愛想がいい人ではないのだろう、彼は小さな容積で応える。ボーカルが彼を紹介するが、歓声と拍手のせいであまり聞き取れない。彼は、一礼してから制服のカッターシャツの袖をまくる。演奏が二番に入った途端、彼は踊り出した。

呆気に取られたまま、俺は手を叩くことしかできなかった。決して背は高くないが、それを感じさせない躍動感を感じた。確かダンス部は無かったはずだから、本人の特技なのだろう。愛想がないという先程の印象とは打って変わって、楽しそうな笑顔で踊り続けている。ダンスには詳しくないが、俺は彼の踊りに魅了されていた。

アンコールにも彼はダンスで参加し、ライブは興奮の渦に包まれたまま終演となった。何度も礼をするバンドメンバーに、観客も呼応して拍手する。その間も、俺は、ゲストダンサーの先輩を何故か目で追っていた。名前も知らないのに、不思議と視線が彼に留まる。彼は、校舎のそれぞれの方向にマジシャンのような気取った礼をしていた。俺がいた側の校舎を向いたとき、一瞬目が合ったような気がした。そのときの、達成感に包まれた柔らかな笑顔が、心の深いところに焼き付いてしまったように離れなかった。

「えー、卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございませう」

ステージに立った校長が、典型的な文句で式辞を始める。毎回、あいさつの類のものは何となくは聞くようにはしているが、今年の卒業式に限っては、俺はそんな気にはなれなかった。卒業生の列に、ダンサーの先輩の姿がどこかにないかと首を伸ばしたが、目立つだろうと思っ諦めた。

あの日以来、三年生の教室の前を通るとき、校章

の色が違う生徒とすれ違うとき、俺は彼がいなかったどこかで期待していた。同じ校舎に通っているのだから、目にすることもあった。そして、季節が変わっていくようにゆつくりと、少しずつ彼のことを知っていった。あの時間聞き取れなかった名前は、平井誠士と言わらしい。観客の盛り上がりからも何となく察していたが、彼はなかなかの有名人だった。俺が見る限りではいつも友達と一緒にいたから、人気者でもあるのだろう。

「続まして、校歌斉唱」

いつの間にか、校長の式辞は終わっていた。周りのクラスメイトが、眠たそうな顔をして立ち上がる。式は終わりに近づいていた。今日で先輩が卒業してしまうことは決まっていた。彼の進路などは少しも知らないが、彼を目で追える日々はもう終わりだ。鼻がつんとするような感じがして、自然と背筋が伸びる。

式の間、結局平井先輩を見つけることはできなかった。三年生が最後のホームルームをしている間、在校生も教室で担任からの諸連絡を聞いた。それが終わると、用が無い生徒は帰宅していく。随分と静かになった教室で黒板を消していると、友人の彩に声をかけられた。

「香坂、あんたも歓迎行くんだっけ」

彩はそう言って無人のグラウンドを指し示す。うちの学校では、卒業生がグラウンドで集合写真を撮った後、友達同士や後輩、先生と写真を撮ったり、別れの言葉を言ったりするのが恒例なのだ。この文化は歓迎と言われ、スマホの使用も黙認されている。

「うん、行くけど。彩も？」

「まあね。部活の先輩と写真撮ってくる」

彩は、長い髪を指先に巻きつけながらそう言った。彼女が腰掛けている机の隣では、彼女の親友であるすが、紙袋からプレゼントらしき包みを丁寧に取り出している。カラフルなペンで書かれた感謝のメッセージでいっぱいの色紙も、人数分重ねられていた。

「そっちも部活の集まり？」

彩の質問に、俺はできるだけ自然に首を横に振る。



俺が所属する部活は、昨日のうちに先輩に色紙は渡していた。そうなんだ、と彩は明るく染めた茶髪を伏せて短いスカートから伸びる脚をぶらぶらさせる。何かあつたのか、と声をかけようとする、手元を目を落としていた彩が突然こちらを向いた。「香坂さ、これから告白していくの？」

告白という言葉の破壊力に、一瞬思考が止まる。頭のとっぺんにその発言の意味が届いて、急に顔が熱くなる。慌てて否定しようとする、同じく目を丸くしていた彩が「ちよつと、何言つてんのー」とすずの腕を掴んだ。

「それは言わないで決めたでしょー」

頭上に大きなハテナマークが浮かんだ俺をよそに、二人は会話を続ける。

「いい加減はつきりさせたいじゃん」すずは、不満そうに短い黒髪をかき上げた。それをたしなめるように、彩は眉をひそめる。

「すず、あんまり踏み込むと逆に邪魔になるんだよ。特に香坂みたいなヘタレは」

「ちよつと、どういふことか全然分かんないんだけど」

間に割って入ると、二人はこちらに向き直る。派手な見た目には似合わない、やけに真剣な表情で彩が口を開いた。

「うちら、ずつと話してたの。香坂、三年に好きな人いるんでしょ」

「思いもよらないことを言われ、言葉を失う。二人に平井先輩について話したことは無いのだ。」

「見てりや分かるよ。いかにも恋してますって感じで、いつつも誰か探してたじゃん」

何かのCMみたいだったよね、と二人が楽しそうに笑い声を上げた。それほど分かりやすかつたのだろうか。恥ずかしさで熱に脳を支配されたみたいだった。

「いや、別に……好きな訳じゃなくて。ただの憧れの先輩ってだけだから」

赤くなつていられるう□元を手で隠しながら、何とか説明する。実際、先輩に恋愛感情を意識した

ことは無かつた。眉間にしわを寄せたままのすずは、でも、と口を開いたが、彩にジェスチャーで止められていた。

「でも、その人に会いに行くのは合つてるよね」

いたずらっぽい笑顔の彩に、凶星を突かれる。僅れと、拒否される可能性への怖さの間で腹をくぐれず、今でも本当に会いに行くか決心できていない。学ランについたチョコクの粉を払うふりをして、俺は二人から視線を逸らした。困つたような間があつてから、再び彩が口を開いた。

「とりあえず、絶対会いに行つた方がいと思つよ。告白まで行かなくても、言うだけ言つてみればいいじゃん」

諭すように、彼女はふつと笑つた。すずも微笑みながら頷く。

「そつだよ。ずつと前から見てました」とか

「それは告白だろ」ツッコミを入れると、すずは「あ、バレた？」とにやりと口角を上げた。やはり確信犯だったか。からかい交じりであるのはよく分かつているが、そつと背中を押してもらつたように、顔の熱が落ち着いた。そのときようやく、平井先輩を本気で探しに行く覚悟ができたような気がした。

グラウンドが騒がしくなつたのに気がついて見ると、いつの間にか三年生の記念写真撮影が始まつていた。二人とくだらない会話を続けながら、少し早足で生徒玄関へ向かう。グラウンドに到着したときは、最後のクラスの番になつてた。部活仲間と合流した彩とすずとは、ここで別れることになる。

「じゃあな、彩、すず。ありがと」

二人と話していなくなつたら、不安に負けて逃げ出してしまつていたかもしれない。できる限りの誠意を込めて二人を見つめると、照れくさそうにそつと吹き出した。

「次会つたら話聞かせてよ」

「思いつきり当たつて、ボコボコにされてきな」

そう言つて、すずは映画のヤンキーみたいに自分の両拳を打ちつけた。いつも通りのくだらない会話に、今日は驚くほど心が助けられている。

「チャンスありそつだつたら、キスぐらい思ひ出に

もらつてきなよ」

彩がまたとんでもないことを言い出した。おい、と大声が口をついて出る。

「だから、好きじゃないんだつて」

「はいはい、分かつたよ」

明らかに分かつていない調子で返された。連絡先だけは絶対に交換しなよ、と言ひ残して、二人は元氣よく手を振つて去つていく。ため息をつきながら、俺は軽く手を振り返した。さつきの感謝を返してほしい。彩の問題発言を振り払うように顔を上げ、俺もグラウンドに足を踏み入れた。

平井先輩を探しながらゆつくり歩いていると、そこら中で生徒たちが写真を撮り合つていた。胸に造花のコサージュをつけているのが三年生だろう。泣きはらしたように赤い目の人もいれば、友達と手をつないで大笑いしている人もいる。グラウンド全体が、あわあわした熱気で包まれていた。二人でハートを作つていられるカップルの写真に映り込みそうになり、慌てて進路を変える。あんなに堂々とできるのはおめでたいと思うが、少しだけうらやましかつた。

平井先輩に恋人がいることは、夏の終わりぐらいに知つた。さつきのすずの言葉を借りるなら、見ていれば分かる、といつたところだろうか。あのときの軽音楽部のライブで、ベースを弾いていた先輩だった。いかにもクラスの中心人物という感じのその人は、二学年下で、先輩とまともに話したこともない俺とは何もかもが違つた。お互いに恋に落ちたというよりは、その人が平井先輩に告白し続けて、オツケーしてもらつたらしい。友人同士ののろけを、偶然に立ち聞きしてしまつたことがあつた。俺が知らない平井先輩をたくさん見ているのだと思つと、少し寂しかつた。

当のバンドメンバーは、ひときわ多くの先輩に囲まれていた。「寂しいです」「来年の文化祭も絶対遊びに来てください」など、涙ぐんでいる人もいてなかなか賑やかだ。その中に平井先輩がいないことに心のどこかでほつとした。恋人と一緒にいるところに声をかけられるほどの勇氣はなかつたし、そ

いうところは、これまでも見ないようにはしていたから。

友人二人と別れてから十分ほど経ったが、平井先輩の姿は見当たらない。まさか帰ってしまったのだろうか。焦りが膨れ上がり始めたとき、先輩の笑い声が聞こえた。辺りを見回すと、グラウンドの隅の桜の木の下に、友人と笑い合っている彼の姿があった。ゆっくりと近づき、「あの」と声をかけると、平井先輩がこちらを向く。目が合つて、突然体の芯に熱が走った。

「えっと、平井に用？」

先輩の隣にいた男子生徒が首をかしげる。先輩の隣でよく見かけた、整った顔だった。きこちなく頷くと、そうなんだ、と呟いて彼はにやりと笑った。もう一人の先輩の友人を引つ張り、部活の皆のここ行つてくる、と平井先輩に言つてその場を去つてしまふ。まさか、あの人も勤付かれていたのだろうか。

あつという間に二人は人混みにまぎれ、俺と先輩が残された。何故か先輩の唇に目が行つてしまふ。彩が変なことを言つたせいだと言いつた後、彼の後ろにある桜の大樹に目を向けた。三月半ばの桜は、まだほとんどが蕾だった。

「君……確か、一年の」

思い出すようにまばたきをしながら、先輩が言う。俺のことを覚えててくれるのか？ そんなはずはない、とすぐに自分で否定する。早く咲いてしまった桜の花びらが、平井先輩の左胸の造花の前を落ちてゆく。

「あれだ、実行委員やつたでしょ。運動会の」

嬉しそうに手を叩き、彼は続ける。確かに俺は、今年の運動会で実行委員をやつていたし、そのとき先輩は応援団長をしていた。打ち合わせで顔を合わせることもや、事務連絡をすることは確かにあったけれど、その程度だ。俺にとつては特別な時間だったが、彼に覚えられているのは本当に想定外だった。「俺、割と人の顔覚えるの早いと思つてたんだけどな。ごめん、名前何だっけ」

香坂です、と開いたままの口を何とか動かすと、香坂君か、と彼は悔しげに笑う。毎日もつと近くで

聞きたいと願つていたその声が、俺の名前を呼んでくれている。動揺と嬉しさと、頭がくらくらした。

「えっと……あの、平井先輩」

やつと俺から話を始めると、先輩は素直に目を合わせてくる。緊張で声がかすれていることも、気づいていないようだ。憧れ続けた人が、本当に目の前にいる。胸が詰まつて、息を吸うだけでも苦しい。どんなことを言おうとしても、口を開けば涙が溢れそうだった。心臓の音が耳の奥に響いて、その度に自らの存在を主張するかのようになり、手のひらの芯がじんじんと疼く。

「俺、卒業生からできるだけサインもらつてるんです。平井先輩もいいですか」

適当に考えた嘘だったが、思ったよりもそれらしく言えてしまった。とつさに手を突っ込んだ学ランのポケットから、メモ帳とシャーペンを彼の前に突き出す。へらりと口角を上げてしまえば、動揺は驚くほど見事に隠せた。いいよ、と先輩は何のためらいも見せずにメモ帳を受け取り、すぐにシャーペンをノックする。素直な人だと思つた。俺よりも十五センチほど背が低い彼の頭は、手を伸ばせば抱きしめてしまえそうなほどの距離にあった。

「はい。あんまり字きれいなじゃないけど」

返つて来たメモ帳には、「平井誠士」とだけ書き残されていた。俺の嘘を信じて、他の人の分のスペーソも考えてくれたのだろうか。色々な感情を押しこめて、ありがとうございます、と笑つた。

「おう。どういたしまして」

ダンサーとして慣れているのだろう、例の気取つたお辞儀を彼は返す。あのとき見た、柔らかな笑顔がすぐそこにあった。

それじゃあ、と笑顔を崩さずに会釈し、回れ右をして歩き出す。何歩か進んだところで、「香坂君」と呼び止められた。振り返ると、平井先輩が駆け寄つてくる。

「せっかくだから、先輩らしいこと言わせろよ。残り二年、まじであつという間だから、思いっきり楽しんで」

少し俺を見上げながら、彼はそう言つてみせる。

ただの後輩への優しい言葉。それで、俺がずっと見ていたことに先輩は気づいていなかったのだと察した。ありがとうございます、と声を絞り出し、今度こそ彼の元を離れていく。勝手に声をかけたくせに自分から去つていくのは失礼だと思つたが、そうでもしなければ、もつと余計なことを言つてしまひそうだった。

先輩は、どんな顔をして俺を見ているのだろうか。そもそも、気に留めずに友達のところに行つてしまったのだろうか。振り向いてみようかと思つたが、勇気はもう使い果たしてしまつた。今になつて指が冷え切つていることに気づく。彩やすがいれば、ヘタレだと非難されるに違いない。眉を八の字にする二人の様子が目に浮かんで、ほんの少しだけ心が落ち着いた。

これで、平井先輩を見ていた一年間はいいよ終わりだ。楽しめと言つてもらつたが、明日からのことなんて想像できなかった。歓送に来ていた生徒も帰り始め、グラウンドを包んでいた熱気は、風船がしぼんでしまったように少し醒めた気がする。逃げないように生徒玄関に着くと、校舎内は静まりかえつていた。教室に戻ろうとすると、中庭が目に入った。そういえば、全てはここで始まつたのか。目を閉じれば、あのときの平井先輩の動きを鮮やかに思い出すことができた。

ゆっくりとまぶたを開く。当然ながら、中庭には誰もいなかった。自分がばからしくて、乾いた笑い声が口から漏れた。その唇に、涙がこぼれてくる。冷えた体とは対照的に、流れたところが熱くなつていく。手の甲で未練を振り払うように涙を拭つたとき、俺は、平井先輩に少しだけ恋をしていたのだと気づいた。

# 【優秀賞】

## 明日の世界

富山東高等学校 二年

氷見 美南萌

暗い暗い闇の中。自分の存在すら時折忘れてしま  
いそうな、深い深い闇の中。その大海の真ん中に、  
僕はただぼつりと浮かんでいた。目の前には厚い黒  
のベールがかかり、自分が今、右を向いているのか、  
左を向いているのか、生きて居るのか、それとも死  
んでいるのかすら分からない。やがて、どうしよ  
もない孤独感が、身体の方から湧き上がってきた。  
それは血液に乗って身体中を廻り、今にも全身  
が凍りつきそうなほど、冷たく、苦しい感覚を伴う  
ものだった。息ができない。僕は身をよじって、も  
がいた。徐々に意識も遠のいていく。そして氣を失  
うすんでのところで、突如ガツンと、殴られるよう  
な衝撃が後頭部に走り、鮮烈な光に臉を焼かれて僕  
は目を覚ました。

何かひんやりとしたものが頬に触れている。はじ  
かれるように起き上がった僕は、自分の身体がいつ  
の間にか、ベッドから冷たいカーペットの上に投げ  
出されていることに気づいて顔を蹙めた。まるで何  
百年も眠っていたかのように、四肢がひどく痺れて  
いる。嫌な夢だった。僕はほやける頭を完全に覚ま  
すために、痛む脚を引きずりながら、微かに光の射  
す窓の方へと歩いていった。窓を思いきり開ける。  
月はまだ高く上っている。少し肌寒い風が頬を撫で、  
僕は夏の終わりの近いことを知った。

僕はもう何年も学校に行っていない。所謂不登  
校である。きつかけは思い出せない。大きな事件が  
あった訳でもない。ただいつからか、人とかかわり  
を持つことを酷く面倒に感じられるようになった。  
常に他人の顔をうかがい、その場に合わせる吐き  
出す言葉を考える。たったそれだけのことが、自分

にはどうにも難しいことだったのだ。孤独感が、日  
に日に僕を蝕んでいった。きつと僕は初めから、人  
とかかわりをもつ才能のない人間だったのだと、割  
り切つて諦めた。それから長い長い逃避行の果てで、  
僕は今、夜空を見上げている。

月の淡い光が、ゆらゆらと風に乗って僕の部屋へ  
入ってくる。僕は何となく、その光に導かれるよう  
に自分の部屋を見渡してみた。空气中を漂う埃が光  
を反射して、壁も、本棚も、長いこと使われていな  
い勉強机も、全てが白く光って見えた。見慣れたはずの  
部屋が、まるで知らない場所のように思われて、  
僕は少し居心地の悪さを感じた。ふと、一際明るい  
光の矢が飛び込んで来て、僕は思わず、その先へと  
視線を送らせた。そこには、大きく書かれた、八月  
三十一日の文字。僕が無意味に人生を浪費したこと  
を示すカレンダーが、まるでそれを咎めるように鋭  
く光を反射していた。ほんやりとその文字を眺めて  
いると、段々不思議な気持ちの中心に芽生えてきた。  
明日から、多くの学生は新学期を迎える。僕以  
外の人間は、ひと夏の非日常にケリをつけて、元の  
生活へと戻っていく。ところが僕はどうかだろうか。  
僕にとっては今が日常だ。みんなにとっての非日常  
は、僕にとつての日常であり、明日からも変わるこ  
となくそれは続いていく。少し寂しい気がした。窓  
の外に広がる夜の街を見つめる。どの道にも、人が  
いる気配はしない。いつのまにか風は止み、時が止  
まっているかのように静かな夜が世界を支配してい  
た。鼓動が早まるのを感じる。少しだけ、少しだけ、  
僕も非日常を味わってみたい。僕は裾の擦り切れた  
上着を引っ張り出して、僕だけのこの夜を壊さない  
ように、そつと階段を降りていった。

街へ出ると、そこには本当に誰もいなくて、まる  
で別の世界に來たようだった。なんとなく、地面を  
つま先でつついてみる。新品の靴から、コンコン、  
と張りのある良い音が出た。なんだか嬉しくなつて、  
わざと音が鳴るように歩いてみる。あふ、と、  
思わず微笑がこぼれた。電灯が、暗い闇の中で僕だ  
けを照らし出す。こんなにも堂々と外を歩いたのは  
いつぶりだろうか。楽しい。楽しい。気づけばもう

僕は走り出して、商店街を抜け、ホテル街を突っ  
切り、いつのまにか街の外れまでやつてきていた。  
ふと、僕は何か違和感を感じて立ち止まった。街  
角にある、古ぼけた映画館。その中から、淡い光が  
漏れていた。おかしい。ここは何年も前に閉館して  
いたはずだ。僕は好奇心に誘われて、建物の入口ま  
で歩いていった。壁はところどころにビビが入り、  
五十年前の映画のチラシが隙間なく貼られてい  
る。それはポロポロに擦り切れて茶色く変色してお  
り、より一層この映画館の歴史を際立たせていた。  
入口の前に立つて、なんとなく服の埃をはらう。硝  
子戸はもはや粉々に割れて枠だけになっており、僕  
を招き入れるように口を開けていた。

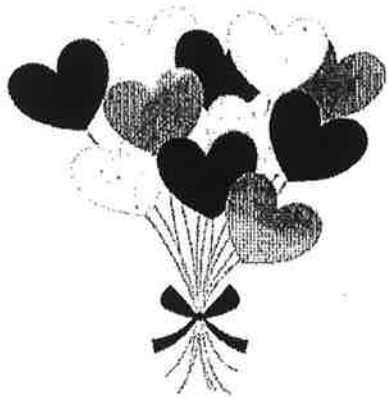
硝子を踏む音を響かせながら、僕は受付の錆びた  
看板をくぐりぬけ、ホールへと足を踏み入れた。そ  
して、あまりに異質な光景に思わず目を疑った。そ  
こでは映画が上映されていた。今にも途切れてしま  
いそうな細かいオルゴールの音色が、両端のスピー  
カーから聞こえてくる。何処からか錆びたリールの  
軋む音が聞こえてくる。まるで、今まで眠っていた  
映画館の魂が、この瞬間だけ息を吹き返したかのよ  
うだ。そして、そのスクリーンに映っていたのは、  
間違いない僕だった。自分の見ている光景が信じら  
れず、僕は何度も目を擦った。力が抜けて、近くの  
座席に崩れるように座り込む。そしていくらかの冷  
静さを取り戻して、もう一度スクリーンを見上げた。  
やはり、そこに居るのは僕だ。白黒の世界の中に、  
確かに存在している。僕はとうとう頭がおかしく  
なったのかと、半ば夢見心地な気分だ、ぼうつとス  
クリーンを見つめた。だらしなく伸びた前髪に、少  
し不格好な眼鏡。時折自分を安心させるように頬を  
さわる癖。しかし、映像の僕と現実の僕では決定的  
に違う点が一つあった。画面の中の僕は、教室にい  
て、クラスメイトらしき人影と一緒にいた。僕は息  
をのんだ。そのクラスメイトは、顔が黒く塗りつぶ  
されていた。そいつが、画面の中の僕に近づくと、何  
かしきりに話したあと、二人はどこかへ走っていつ  
た。場面が変わって、今度は帰り道だろうか。何人  
かの人影と肩を並べて、時々小突きあったり覗いた

りしながら、遠くの方へ歩いていった。そんなふうな映像が延々と続いていく。スピードカーから聞こえてくるのはオルゴールの音だけのはずなのに、今にも彼らの弾けるような笑い声が聞こえてきそうな気がした。いつのまにか僕は立ち上がっていて、食い入るようにその画面を見ていた。記憶には無い光景のはずなのに、なぜか酷く懐かしい。胸の奥のかたまりがズキズキと疼いた。無意識に手を伸ばす。諦めたはずなのに。もう遅いかもしれないのに。それでも僕は、その日常を望んでしまった。もしもあの世界に行けたなら。もう一度やり直せたなら。ああ、僕はきつと傷つくのが怖かっただけだ。人とかかわるのが面倒だとか、才能がないとか格好つけた言い訳をしておいて、本当は当たり前前の日常を心のどこかで欲していたんだ。思い出した。僕が一日だけ登校した時のこと。声をかけてくれた奴がいたことを。まだ、届くのだろうか。段々と視界がぼやけていく。頬にあたたかきものが伝っている。揺らぐ視界の中で、もう一人の僕は確かにこちらに向かつて微笑んでいた。

誰かが僕を呼んでいるのが聞こえる。優しく手を引かれて、僕は歩いていく。と、突然身体が宙に浮く感覚がして、いつかと同じ鋭い痛みと共に、僕は意識を手放した。

見慣れた天井。見慣れた朝。僕は痛む頭をおさえてゆつくり立ち上がった。このところ寝相が悪いのかも知れない。不思議な夢だった。一階から、朝食の良い香りが漂ってくる。僕はその香りに微笑みながら窓を開けた。清々しい朝の風が、寝癖のついた僕の髪を優しくとかす。その風につけて、子供たちのはしゃぐ声が運ばれてくる。昨日まであんなに煩わしく思っていたそれが、何故か今はあたたかくて心地のいいものを感じられた。窓の横の、ずつと埃を被ったままの制服に手を伸ばす。そつと指で、なぞると、くすんだ灰色の中から、艶やかな黒が顔を出した。何回か埃を払ってやると、それはたつた今買ったばかりのようにつやつやと光を反射してきらめいた。一度深呼吸をして袖を通してみる。それは微妙にあたたかくて、僕の心の奥にも熱が灯つたように

感じられた。ゆつくりと、一歩一歩を踏みしめるように、部屋の入口へ歩いていく。古い自分を捨て去るようにドアを開く。そして、新しい世界に踏み出すように、僕は階段を駆け降りていった。



【優 秀 賞】

徒花と涙

富山南高等学校 二年

前田 拓海

花火の先端にロウソクの火を移す。すると、シューという音とともに火花が吹き出し、家の庭先を火薬のにおいで包み込んだ。赤から緑、緑から白というように次々と火花の色が変わっていく。次第に勢いは弱まっていき、ついに完全に火花も出なくなった。それを水の入ったバケツに入れる。すると、微かにジュツという音がした。

なんとも夏らしい光景だ。昔々という程でもないかもしれないけれど、小学生時代を思い出す。あの頃はよくここで火花をしながら騒いでいたものだ。ただし、そのころとは決定的に違うことが二つある。一つは、俺たちは成長して、もう高校一年生だということ。そしてもう一つは…。

「なあ、なんで冬なのに俺たち花火なんかしてんの？ 香葉」

今日の日付は十二月二十五日、クリスマスだ。昨日降り積もった雪がそこしこに残っているし、軽く着込まないといけないくらいには肌寒い。それにクリスマスなんだから中心街の方に行けば、イベントやらで賑わっているはずだ。

そんな中で高校生の男女二人が季節外れにも程がある花火をしているのは、傍から見ればおかしな光景だろう。

「えー、いいじゃん。冬にやるのも新鮮で楽しくない？」

火花を散らすスパーク花火を持った香葉が、笑いながら言う。

「楽しくないわけじゃないけどさ。…せつかくクリスマスなんだから街の方出ればよかったじゃん」  
「つまり私とデートしたかった、と」



そんな彼女からの報告。どうしても嫌な考えが思  
い浮かぶ。でも、聞かなくては。  
無意識のうちに俯いていた顔を上げて見た香菜の  
表情は暗かった。いつものキラキラとした眩しい  
姿はなく、ただ憂いのみが残されている。

香菜は最後の一本となった線香花火に火をつけて  
から口を開いた。

「昨日、友達と一緒に遊びに行つたんだ。イルミネー  
ション見に行こうって」

香菜の唇が少し震えていた。

「その時にさ、たまたま見ちゃつたんだ」  
肩で息をしていた香菜が、すうつと深呼吸をした。  
その顔は俺も見ることがないほど、悲しみを帯びて  
いた。

「先輩と、横に女バスの部長がいて……すごい仲良  
さそうに、腕とか組んで」  
泣き出してしまふんじゃないかと思えるほど、声  
は震えて、呼吸が浅かった。

「キ……スしてた」

香菜の表情は依然暗いままだった。

俺は……何も言えなかった。

別に何も思わなかつたわけじゃない。香菜の沈ん  
だ顔を見て、心がギョツとなつた。ただそれとは裏  
腹に、一瞬、ほんの少しだけこう思つてしまつた。

「よかつた」

僅かでもそう思つた俺が、今の香菜にどんな言葉  
をかけられるだろうか。そう思うと、何も言い出せ  
なかつた。

しばらくの間沈黙が鳴り響く。香菜の手元で煌々  
と輝く花火の音がやけにうるさかつた。

そんな沈黙に耐えきれなかつたのか、香菜が乾い  
た笑みを浮かべながら話し始めた。

「いやあ、でも、これでよかつたかなあ、なんて」  
やけに明るい口調だつた。

「……え？」

本気で意味が分からなかつた。失態したのに、「こ  
れでよかつた」？。

困惑が伝わつたのか、香菜がその説明を شدした。  
「いやあ、だつてさ、どうせ告白してもフラれてた

訳じゃん。だつたら先に知れて、惨めな思いしなく  
て済んだんだし、ラッキーかなつて」

「お前、そんなこと」  
「だから大丈夫だよ。全然気にしなくて大丈夫」  
「……ッ」

香菜は笑つた。いつものような明るい笑顔だつた。  
でも、俺にはその裏の悲しみが透けて見えた。

昔からそうだつた。

どんなことが起きても、「大丈夫」って笑う。  
そんな奴だつた。昔の俺はきつとそんな香菜の強さ  
に惹かれたんだと思う。

でも今なら分かる。香菜の強さに見えていたもの  
は、仮面みたいなものだつたんだらう。誰にも心配  
を掛けないように、強いふりをするための。

今も香菜は弱い部分を隠そうと笑つて強がつてい  
る。それがどうしようもなく苦しい。

それと同時になんだか自分が馬鹿馬鹿しくなつ  
た。

何が「よかつた」だ。その辛さは身をもつて分かつ  
ているだろうか。

言えないまま終つた恋がどれだけ辛く、虚しい  
ものかを俺はよく知つている。

言えなかつたけど逆にラッキー、なんてない。た  
だ満たされたい想いが、胸の内でも燃り続けるだけだ。  
だから、今俺がやるべきなのは香菜に恋した男と  
してじゃなく、友達として――

「もう我慢すんなよ」

「……え？何？」

意外な言葉だつたのか、暗い笑みを浮かべながら  
も困惑した様子だつた。

「泣きたいなら泣いてもいい……なんでもいいけどさ。  
そうやって変に気に遣つて自分の気持ちに嘘つくな  
よ」

「私は別に……嘘なんか――」

「だつたらなんであんな辛そうな顔してた」  
「そ、それは……」

困惑だつたのか、香菜は黙り込んでしまった。

「俺は香菜の……友達だから、そうやって無理させたく  
ないし、してほしくない。少しでも辛いなら、ちゃ

んと言つてほしいんだよ」

もう、あんな香菜の強さなんて見たくないから。  
だから――

「もう大丈夫だから」  
「……」

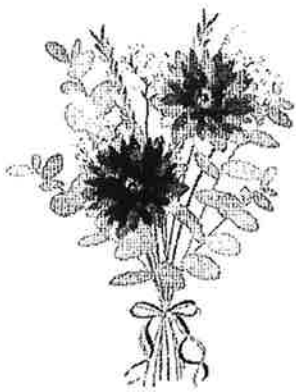
しばらくの静寂の後、香菜が口を開いた。  
「ごめん、これちょっと持つてて」

そう言つて香菜はもう消えかけの線香花火をこち  
らに差し出した。火花がゆらゆらと揺れている。  
俺が線香花火を受け取ると、香菜は背をむけた。

「このこと、誰にも言わないでよ」  
「もちろん」

香菜の肩が少し震えた。

冬の風が身に染みる。  
線香花火の小さな雫は、冬の空を僅かに舞い、静  
かに消えていった。



# 【佳作】

## 怪我の功名

高岡南高等学校 二年

蔵野美琴

金曜日の放課後、というのはどうしようもなく浮足立つものである。明日から始まる二日間の休みに向けて、五日間の学びを耐え抜いたと言っても過言ではない。クラスの連中はやれ映画だのカフェだのと、放課後を思う存分に楽しむつもりようだ。

かくいう俺はというと、残念ながら放課後を共に過ごすような知り合いはいない。先日買った新作のゲームが待っている家へ今すぐ帰りたい、というのが本音だ。逃る気持ちそのままに、次第に歩くスピードは速くなっていった。きつと、気持ちだけでなく体も前のめりになっていったのだらう。角を曲がるうとした時、まるで少女漫画のように誰かとぶつかり転んでしまった。勿論、相手は食パンを唾えていないようだが。

「ごめんさい、怪我は？」  
そう言っただけで差し出された手に縋って立ち上がるのもどこか気が引けて、自分の力だけで立ち上がり、頭を下げた。

「すみません、よく前を見ていなくて」  
「——右肘、怪我してる」

差し出した手で、今度は俺の右肘を指して相手は言った。目線を移すと、白いカッターシャツに滲む血が目に入った。どうやら、まだ血は止まっていないようだ。圧迫して止めようとするが、ジクジクとした痛みを感じて思わず顔を歪めてしまった

「痛いんですよ。手当をするから家来てよ」  
「えっいや、ぶつかっただけでいいから……」  
「怪我させちゃったお詫言だから」  
ここからすぐそこなんだよね、と言って半ば無理矢理に俺の腕が引く張られる。抵抗することは可能

だろうが、今度は俺が怪我をさせてしまうかもしれない。  
「足は痛む？」

「あ、いえ……」  
「そう、良かった。その角を曲がれば見えてくるよ」  
変わらぬ強い力で腕が引く張られながら角を曲がると、何やら重厚な門が目に入る。そのまま進むと、次第に家——いや、屋敷と表現した方が良いかもしれない——の姿が明らかになってきた。外壁は白く、瓦は対照的に黒々と太陽の光を浴びて輝いていた。

「……大きいですね」  
「見た目だけの家だよ」  
遠慮しないでどうぞ、と言われると同時に門が開く。しかも自動で。

この大きな門を通る、という行為に既に俺は身構えていた。自分の意思でここまで来たわけではないのだ、無理矢理引張られただけに過ぎない。それなら何かしらの理由を付けて帰ってしまえばいいのじゃないのか、なんて考えが頭をよぎる。だが、失礼になってしまふんじゃないのか。そういう考えも頭の片隅にある事実は否定できない。

「ほら、怪我の治療はなるべく早い方がいいんだから」  
「いや、でも俺……」  
「もしかして、この後彼女とデートだったり少し冷やかすような口調。俺は、どうにもこれが苦手だ。」

「彼女がいるように見えますか？」  
「……」  
「そこで黙らないでくださいよ」  
やや呆れたように言葉を投げ捨てると、冗談だつて、といった言葉が返ってくる。笑えない冗談は心の内に留めておいてほしいものだが。  
「まあ確かに、何も聞かずに連れだして悪かったとは思」  
「着坊ちやま、お帰りなさいませ。あら、そちらの方は？」  
途端に、門から入って右手奥にある庭のような所

から、着物を着た老人がやって来てそう言った。  
「ああ、怪我させちゃったから連れてきたんだけど……」

「まあなんとお怪我を——どうせまた『宝探し』に気を取られていたのでしょうか？ あれほど周りをよく見るように、と申し上げておりましたのに」  
老人がくどくどと文句のように言葉を並べる。それを聞いた着坊ちやまは、どことなく口をとがらせているように見えた。

「いえ、ぶつかっただけで俺の方で……」

「ばあや、彼は悪くないんだよ」

「ええ。よおく存じております。大方、坊ちやまが邪魔な場所に行ったんでしょ」

老人は、そう告げた後に俺の方を向いた。

「お名前をお伺いしても？」

「……桂樹です」

「桂樹様、使用人の幸恵でございます。この度は坊ちやまが迷惑をおかけしました」

「あ、そんなそんな……」

自分の名前に初めて様が付く。なかなか気恥ずかしい。しかし、考えてみればこんな経験はそうそうないだろう。せつかくなら楽しんでみていいのかも。ならない。なんて思うが、俺はそれ程強い人間ではない。

「手当の用意はすぐにできますので、どうぞこちらへ」

今度は幸恵さんに手を引く張られ、屋敷の中へと連れ込まれる。玄関に入った瞬間、なにか良い香りが鼻を通ったような気がした。

「お香の香りがしますでしよう。昔、坊ちやまがお香自体を食べようとしたことが——」  
「ばあや」

「失礼致しました。桂樹様には関係のない話でした」  
右手の部屋でお手当致しましょうか、と幸恵さんは付け足し、俺たち三人はその部屋に置かれていた高級そうな椅子に腰かけた。

「手当に関しては、坊ちやまの方がお上手なんです。小学生の頃は、よく怪我をして帰ってこられた

のですよ。それはそれは屋敷中で心配いたしました。次第にご自分で手当をされるようになって……ああ手当てと言えば、あれは坊ちゃんまが九つの時——

「はあや」  
「これはこれは。すぐ用意してきますからね」  
椅子から立ち上がった幸恵さんはそう言った。一度腰を下ろした、ということとは長話でもするつもりだったのだろうか。

立ち上がった勢いそのままに部屋を小走りが出て、言葉通り三分もしない内に幸恵さんは戻ってきた。誉さんに諸々の道具を渡した後に、幸恵さんは夕飯の準備がある、とのことでもた部屋を出て行った。

「……ごめんね、ばあや話好きなんだ」  
「お元気でいいじゃないですか」  
「まあ笑顔がないよりは、ね」  
服巻るよ、と言われたと同時に怪我をした箇所が露わになる。

「ちよつと染みるけど、我慢してね……うん、偉いじゃん」  
「痛みを我慢して褒められる年齢じゃないですよ、俺は」  
「年上からの言葉は素直に受け取っておくのが上手く生きるコツってもんよ」

腕を組んで、まるで子どもに言い聞かせるように誉さんは話す。子ども扱いしないでください、と言いかけてやめた。誉さんの言っていることに一理あると感じたからだ。確かに、俺はただか十七歳のひよっこ。自分より長く生きている人間の言葉は、少なくとも俺の言葉より説得力があるはずだ。

「……ま、俺が言えたことじゃないけど」  
「誉さんがそう咳く。一瞬、笑顔が消えたよさな気がした。」

「あー、気にしないでいいから。ただの独り言」  
気にしないでいい、と言われると気になってしまふのが人間の性だ。微妙な空気が流れ出し、少し気まずい。

「……じゃあ、今から話すのはちよつと長い独り言。桂樹くんは俺に手当てを受けている間に聞いて

しまった。いいね？」  
俺の考えていることが読まれてしまったかのよう

に、誉さんはそう言った。軽く頷くと、満足したように笑って、話し始めた。  
「……俺ってさ、割と恵まれた環境で生活してるワケ。一応金は浴びるほどあるし、顔はいい方だと思うしね」

人生イージーモードってやつかもね、と軽く笑って続ける。だが、俺の怪我の状態を見ている誉さんの笑顔は、決して楽しそうな笑みではなかった。  
「そんなんだからさ、いじめとか受けてきたのよ。教科書に落書きとか、蹴られたりとかさ」

いじめ。その言葉が鉛のように心に重く沈んだ。  
「別に今となつてはどうでもいいけど、やつぱ当時はキツかったよね。好きだった子に憐れんだ目で見られたのは心に来たけど、一番は親に嘘をつかさやいけなかつたことかな」

絶対に面白い話でもない。軽快な話でもない。なのに、どうして誉さんはこんなに軽く話せるのだろうか。どうして、そんなに強くいられるのだろうか。  
「学校はどうだ、つてしよつちゅう聞かれるからさ。架空の友達のジュンくんを作つて嘘の話をした。でも、ゼロから生まれた嘘はいつか絶対に壊れる」

誉さんは軟膏の蓋を開け、人差し指で掬い取った。ちよつと痛いかも、と俺を見ずに話す声が少し、低くなつた。  
「今まで抱え込んでたものが、一気に溢れたように我慢できなくなつた。俺をいじめた奴らを思いつきり殴つた。そこからは芋づる式に俺がいじめを受けていること、ジュンくんなんて本当はいないことが親に伝わつた」

けど、と軟膏がまだ付いている指が固く握られて言葉が続く。  
「親は俺の味方をしなかつた。いじめなんてお前の被害妄想だろう、他人を殴つておいてその言い草はなんだ、つて言われた。もう本当に嫌になつてさ、それから親とは軽い絶縁状態。この家は父が所有していたもので、唯一味方してくれたばあやと一緒に家を出て暮らしてる」

家庭がある分だけ、信条がある。子どもの育て方がある。それは十分理解しているが、どうしても誉さんの家の教育方針だけは理解できなかった。

「この家に移り住んでしばらくした頃、ばあやが新作のゲームを買つてきてくれた。もちろん、今でもゲームは大好きだけど」  
自分とは全く違う世界に住んでいると感じていたのに、ゲームという共通点があるのは意外だった。

「自分じゃない誰かになれる世界は凄いいんだつて、子供心にそう思った。そして、自分の世界にも素晴らしいものを見つけたくなつて、『宝探し』を始めた」  
誉さんは顔を上げてそう言った。

「この町で一番綺麗な景色を見つけた。蟻の行列をずっと辿つて、知らない場所まで行ったこともあつた。全部、本当に楽しかつた」  
絆創膏の剥離紙を剥がしながら、誉さんは続けた。

「こんなに素晴らしい世界を楽しまないなんてもつたいない、つて思うようになってからは、毎日が嘘のように楽しかつた。街を歩いている人全員が、俺の知らない素晴らしいものを教えてくれるかもしれない、つて考えたら、胸がもつと高鳴つた」  
怪我をした所に、絆創膏が貼られる感触がした。

「桂樹くん。君とおつかつた時、俺は正直ワクワクしたんだ！ これから起こることが楽しみで仕方なかつた。だから君を家まで連れてきちゃつたんだよね」  
ごめんね、と言わんばかりに誉さんは首を傾け両手を合わせる。

「……独り言じゃなかつたんですか？」  
「あ、つて」  
いいじゃんいいじゃん、と俺を冷やかした時のように軽口を叩きながら、俺の袖が戻される。

「良かったら、夕飯食べてかない？ シャツに付いた血も落とさなきゃ」  
さすがに申し訳ないです、と言おうとした時、部屋の扉が勢いよく開いた。

「坊ちゃん、一大事ですー 白米が多く炊けすぎてしまいましたー」



「ほら、ばあやもこう言ってるし」  
 断るに断れない雰囲気を感じ、とうとう夕飯まで頂いてしまうことになった。シヤツに付いた血は、幸恵さんの技術で綺麗に落ちた。やり方を聞いたので、母親に伝授してみようと思う。一応、両親には友人の家で夕食を食べてくる、と連絡を入れた。今までのそんなことはなかったが、メッセージの通知がひっきりなしに届いた。少し申し訳なく思いながら、スマホの電源を落とした。家に帰れば、質問攻めが待っているだろう。今のうちに、心構えをしておくというのが吉というものだ。

誉さんの家を後にした帰り道。俺は、三人で夕飯を食べていたことを思い出していた。

なぜ俺にあの話をしたのか、と聞けば俺が好きだった子に似ているからだと言った。誉さんは強い人だ。自分自身の過去はまるで上手く刺がれなかった。自分自身のように、なかなか消えない。でも誉さんは、刺がれないシールを綺麗に覆い隠す程の壁紙を持っていて。俺にも、出来るのだろうか。

いつでも来てよ、なんて誉さんが言うので、街中で誉さんに出会ったら話しかけてみようか。夕飯時には少ししか聞けなかった誉さんの話を、もつともつと聞きたい。

そして、誉さんが今よりもっと素晴らしいものを見つけて、それが世界中の人間に届けばいい、なんて祈る。

空には今にも夜が始まることを告げるように、月が輝き始めていた。

【佳作】

香跡

高岡南高等学校 一年

藤川 紗矢香

朝。せつかくの日曜日だというのに天気はあいにくの曇りで、どんよりと重苦しい空にこつちまで憂鬱になりそうだった。どうせなら雪でも降ればいいのに、と日比野祐希はほんやりと考えたが、すぐに雪かきに駆り出されるだけということに気が付き落胆した。それにしてもだるい。何もする気が起きない。少しでも気分を入れ替えよう、と窓を開けて冷たい空気の中に身をさらしていると、「なあん」と小さく鳴き声がした。

「猫……?」

祐希は窓から身を乗り出して鳴き声の主を探すが、見当たらない。もう行ってしまったかと体を起こそうとしたとき、もう一度、「なあん」と声が聞こえた。さつきよりも近い。しかも、音のした方向は――。

「なあん」

まさか、と思つて振り向くと、部屋の中心には一匹の猫がいた。なぜか、猫を中心として香水のような香りが部屋中に立ち込めている。シトラスにも似たその香りは、祐希の混乱した頭を次第に落ち着かせた。

「君、どこから来たの? というかどこから入ってきたの?」

しゃがみ込み、目線を合わせて問いかける。メイソクンだろ? もふもふとした長い毛並に思わず手を伸ばすもぶいと避けられてしまった。無念。

「にゃあ」

猫はそのまま一声鳴いて部屋から出ていこうとするものだから、慌てて追いかけるはめになった。

大腿で歩いて一足先に入口へたどり着き扉を開ける。扉も開いてないのにどうやって出ようとしたんだか。そこまで考えて、この猫は気づいたら中にいたことを思い出したのでいったん考えるのをやめた。猫は祐希の混乱を無視してぼてぼてと歩いていく。猫が横を通るとき香りが強くなったものだから、やつぱりこの香りは猫からしているのだろう。よくわからないけどそのまま元居た場所に帰るのだから、そう思いながら眺めていると猫はこちらを振り向いて静止した。

「どうしたの?」

そう言つて近づくと、猫は何事もなかったかのように歩き出した。なんだつたんだろうと思いつつ自室に戻ろうと踵を返そうとするとまた止まった。心なしか視線が痛い。近づくと歩き出し、こちらが止まると猫も止まる。近づくと進む、止まると止まる。

「もしかして、ついでに……?」

返事はない。しかし、距離が開くたびに振り向かれるとなるとそうとしか考えられなかった。猫はいつの間にか玄関までたどり着いていて、早く開けるというように祐希の目をじつと見ている。

「はいはい、わかつたつては」

祐希も慌てて靴を履いて玄関のドアを開ける。

「いつてきます」

ちよつとあんだと行くのという母親の大声は聞こえないふりをした。

人通りの少ない道路を一人と一匹で歩く。冬特有の鋭い空気に、せめて上着を着てこればよかったと後悔した。なんせ慌てて追いかけたせいで、スマホくらいしか持っていないのだ。いくらもとも温かい恰好をしていたとしても限度があった。寒い寒いとポケットに手を入れると、何か固いものが指先に触れた。何か入れっぱなしだったのだろうか。指先から伝わる感覚で中身を想像しながら取り出すと、百円硬貨が二枚顔を出した。

「どうしよう、これ」

思わぬ収入、といえは嬉しいことのように感じるが、たった二百円ぼちでどうしろと。カイロを買おうにもすぐ近くにコンビニはないし、そもそもこのあたりにバラ売りなんて親切設計をしているところはない。意味ないなあと手のひらで硬貨を遊ばせていると、前方で猫が突然立ち止まった。猫は何かをじっと見ている。猫の視線の先に自らも目を向けると、そこには一機の自動販売機があった。遅れて自動販売機前までたどり着くと、猫は前足で器用に自動販売機を指した。

「買って？」

祐希は独り言のつもりだったのだが、思いがけずなあとお高い声が返ってきた。改めて自動販売機を覗くと、冬だからかココアやミルクティーといったホットドリンクが多く並んでいた。なるほど、あたまたれとでもいうことだろうか。家を出てから寒い寒いとさぞうるさかつたろう。手の中ですつかりぬるくなった硬貨をコイン投入口に入れる。ガタンと音を立てて落ちてきたのはちみつレモンはじんわりと温かかった。足元の猫を見る。こちらを見上げるもふもふからは、やはりシトラスの香りがする。

「ずっと猫って呼ぶのもな……。メインクーンみたいな見た目してるし、メイちゃんって呼んでもいい？性別知らないけど」

「にゃあ」

これは許可が出たということなのだろうか。心なしか明るく聞こえたし、いいということにしておこう。猫あためメイちゃんは相変わらず祐希のことは意に介せず進んでいるように見える。それでも、祐希が見失いそうになると必ず止まって待っていてくれた。メイちゃんを中心に漂う香りも、万一见失ったときの道しるべのように感じてくる。この子は、そうまでして自分のことをどこへ連れていきたいのだからか。ふとそう思った。

かれこれ数十分は歩いただろうか。太陽も次第に高くなり、歩き続けていることもあつてだんだんと体は温まってきた。特に運動神経がよくない祐希は

歩くペースが少しづつ落ちてきていた。メイちゃんとの距離感が変わらないのは、きつと合わせてくれているんだらう。本当に賢いなど祐希は感心した。いつのまにか、知らない町まで来ていた。

「メイちゃん、どこまでいくの？」

そう聞くと、メイちゃんは一度立ち止まり、こちらを向いて一声、

「みゃあ」

と鳴くと駆け出した。祐希も一瞬遅れて慌てて追いかける。メイちゃんの姿はずでに遠く、曲がり角にでも進んだのかいつの間にか完全に見えなくなつた。それでもあのシトラスの香りはメイちゃんに通つた道がありありと示していた。走っているうちに、知らないはずの景色が、どこか見知つたものになつていく。街並みそのものには見覚えがないのに、通りの看板や小さな川の上に通る橋や大きな銀杏の木が、やけに懐かしく感じる。周囲を漂う香りが少しずつ強くなる。メイちゃんが目的地に着いたのだらう。少ししてたどり着いた場所は、祐希にとつては思い出深い場所だった。

「ママ、ひよつとして……」

記憶がよみがえる。まだ一人で留守番もできないほど幼い頃、祐希はよく母親の職場のあるこの町へと連れてこられていた。そして、母親の仕事が終わるまでの時間を、まさに今いるこの公園で過ごしていたのだ。今考えれば子供を一人で見知らぬ町の公園に置いていくほうがよほど危険だと思わなくもないが、他の子どもの親の目があつて、仕事が終わればすぐ顔を見せられるこちらのほうが母親としては安心だったのだらう。もともと、幼い祐希はただ長時間遊べる日、という認識だったが、そうは言つても所詮はよそ者、友達はおらず数少ない遊具もすぐに遊びつくしてしまい、祐希は暇を持て余していた。

「ひまだな」

ベンチに腰掛け呟いたその時、どこからか猫の鳴き声があった。

「え、ねい？」

きよろきよろとあたりを見渡すも鳴き声の主はど

こにもいない。気のせいかと落ち込みかけたその時、もう一度、先ほどとは違う位置から鳴き声が聞こえた。

「なあ」

「やつぱりいるんだー」

その日から、祐希の暇つぶしに猫探しに加わつた。それは、初めて鳴き声を聞いてから何度目の来訪だったのだろうか。いつものように鳴き声がするほうへと足を進めると、そこでは祐希より少し年上のように見える男子達が何かを取り囲んでいた。

「にゃあ、にゃあ」

男子達の間から、いつもより弱った鳴き声が聞こえる。よく見ると、男子たちは取り囲んだ猫を蹴飛ばしたり、猫に向かって石を投げたりしていた。

「な、なにしてるのー」

「何って……遊んでるだけじゃん。ていうかお前だけ？」

思わず叫んだ祐希に、男子の一人が答えた。確かに男子たちはみんな笑つていて、傍目から見れば遊んでいるように見えた。しかし、足元にあるのはサッカーボールではなくて一匹の猫なのだ。それを「遊び」とは、祐希にはとても思えなかつた。

「このねこはゆーきとあそぶのーかえしてー」

「は？俺らが先に遊んでたんだけど。どつか行けよチビ」

「やだーゆーきのほうがずっとまえからさがしてたもんー」

「あーもうなんなんだよチビーうるせえなー」

しばらく祐希と男子達でぎゃあぎゃあど叫んでいたものの、祐希のあまりの騒がしさにうんざりしたのか男子達はやがて猫を置いて離れていった。

「ねこ、だいじょーぶ？」

「みゃあ」

「よかつたーじゃああそぼー」

それから、猫は今まで見つからなかつたのがなんだったのかというほど、祐希が公園に来てすぐに会いに来てくれるようになった。猫と遊ぶのは本当に楽しくて、それまではただただ長いだけだった時間



が一瞬で過ぎていくようだった。あの猫は今どうしているだろう。もう十年は前だし、もういなくなつてしまつたらどうか。大きくてもふもふして、ちよんちよんメイちゃんにそっくりな——

「というか、もしかしてあのときの？」

「にやあ」

メイちゃんは、やつと気が付いたかともいうように嬉しそうに鳴いた。

メイちゃんの後について公園をまわる。幼い祐希には大きく見えたすべてが、今となつては小さく見えた。あの滑り台で派手に転んだとか鉄棒にメイちゃんぶら下げたのが懐かしいとか、たわいもないことが口から零れ落ちる。メイちゃんは意味を理解しているのかいないのか、みやあ、なあん、と相槌を打つように鳴いていた。しばらく公園内を散策していると、メイちゃんが茂みの中へと入つていった。なあなあとこちらを呼ぶような鳴き声に意を決してメイちゃんのもとへ向かう。近づくにつれて聞こえてくる、明らかにメイちゃんではない複数の鳴き声。メイちゃんの隣には、段ボールに入つた三匹の子猫たちがいた。どの子もすいぶん弱っている。

「もしかしてこの子たちを助けたかつたの？」

そう言つてメイちゃんがいるはずの方向に体を向けるも、そこにはもう誰もいなかった。シトラスの香りだけがほんのりとあたりに残っている。あたりには枯れ葉も落ちていて、離れていったなら音で分かるはずなのに。でも、と祐希思い返す。幼いころ、一人の自分に寄り添つてくれた時も、突然現れては帰るころにはいつの間にかいなくなつていた。

「とりあえず、この子たちにミルクでも飲ませてあげないと」

段ボールを抱えて立ち上がる。この子たちのためにも、早く家に帰らないと。

なあん

シトラスの香りの風に乗つて、頼んだよ、とでも言うような猫の鳴き声が聞こえた気がした。

## 【佳作】

### ナイトダンサー

南砺福野高等学校 一年

西川 朋花

夜も更け、ネオンが淡く色づいた頃。人々が行き交う交差点に、少女はいた。いや、彼女はもう少女と呼べる年頃ではないのかもしれない。だが、この夜の間にだけは、彼女は、少女だったあの頃に戻っているのだ。

少女はアスファルトに描かれた白線を飛び越えながら、時々笑う。まるで、それが心底楽しいと言ふかのように。少女が跳ねると、身に纏つたドレスはふんわり揺れ、耳元のイヤリングが、それにかえすようにキラキラと輝いた。この少女には、周りのざわめきなど、少しも聞こえていないのだ。しかし、少なくとも、今までの少女は、こんなことが出来るような性格ではなかった。むしろ真逆だ。

彼女は目立ちたがらず、極力人との対話を避けていた。それはひとえに、人からの否定が怖かつたからだ。本当の自分を拒絶されることは、彼女にとって耐えがたいことであつた。だから、ぼろつと心の内が漏れてしまわないように、彼女は「関わらない」ことを選んだ。

もう、周りを気にせず好きにはしゃいだあの頃には戻れないのだ。

少女が手すりに手を添えて、くるくると回りながら階段を上る。足元のブーツからは、軽やかな音が聞こえた。このブーツは、おそらく六年ほど前だろうか。その頃に、就職したばかりの自分へのご褒美として買ったものだ。ただ、その靴を履くことは今日まで一度もなかった。だって、こんなに可愛い靴、到底自分に似合うわけがなかったから。それにもし履いたとして、歩いている途中で、その行き先で、同僚に会つたら？ 慣れない靴で歩いて転んでしまつたら？

まつたら？

履こうか迷えば迷うほど、履かない理由を探してしまふ。そうしているうちに、もう疲れてしまつて、引き出しの奥に仕舞つておくことにした。今着ているドレスも、似たような経緯で買つて、似た理由で奥へ仕舞つていた。

もう二度と、傷つきたくなかつたから。少女は鼻歌交じりに道を歩く。すると、ある広場で足を止めた。キラキラと明るい美術館の前にあるその広場には、大きな噴水があつた。それは、大きくなつたり小さくなつたりと、まるで大きな波であるかのように揺らめいていた。少女は惹かれるように、噴水へ近づき、ゆつくりとステップを踏み始めた。

少女は踊る。色鮮やかにライトアップされた噴水の前で、決められたような動きじゃない、体が動くままに、心が望むままに。

そうしていると、一瞬、少女の目に、小さな男の子が映つた。その子は、大きなテイyipアを抱え、それに顔をうずめていた。その姿はまるで、あの時の少女であるかのようにだつた。好きなことを好きと言えた、あの頃に。

思えば少女は昔から、可愛いものが好きだつた。だからお店でぬいぐるみを見つけては、可愛い服を見つけては、親に「買って」と言つてねだつていた。その頃が少女にとつて、一番幸せだつたのかもしれない。だが、小学一年の秋に、事件は起こつた。

その学校は私服制度だつた。だから、少女はいつもレースのついたふわふわのワンピースを着ていた。もちろん規則には違反してはいない程度の、だ。だが、日直の仕事で教室に残つていた時、同じ日直の女の子が口を開いた。

「なんでいつもワンピース着てるの？ それ、おんなのこのふくだよ。」

小学一年生だ。今思えば、ただ単純な疑問だつたのだろう。でも、「おんなのこのふく」という言葉は、少女に大きな衝撃を与えてしまつた。自分は皆とは違うのだ、と。その時、その瞬間から、少女は

自分の思いを隠すようになった。ぬいぐるみではなく車のおもちゃをねだるようになった。おままごとじゃなく、鬼ごっこに混ざるようになった。少女は少年になるように努めた。気は乗らなかつたが、仕方ないのだ。自分はどうかやら、人とは違らしいから。

そうして、少年が青年になるまで、そう多く時間はかからなかつた。国公立大学に合格できた彼は無事に卒業し、そこそこの会社に就くことが出来た。だが、やることは変わらない。いつも通り「普通」を演じて過ごすだけだ。無難に、目立たないように、ばれてしまわないように。

そんな彼は、可愛いものと同じくらい星を見るのが好きだつた。キラキラと瞬くそれは、まるで夜空に散りばめられた宝石のようで、見るたびに心が躍つた。だから、初めて流星を見た時、少女は物凄くはしゃいだ。ベランダで目を輝かせ、辺りを跳ねた。

その流星はすぐに消えてしまつたけれど、少女は寝るまで、興奮は冷めやらなかつた。そして、あの流星をもう一度見たいと、そう願つた。でも、青年がアパートのベランダで、煙越しに流星を見た時、特に心は動かなかつた。生まれたのは、もう戻れない後悔と、どうしようもない喪失感のみ。彼は煙草の火を消して、夜空に背を向けた。

それが、今はどうだろう。鮮やかに変化する噴水の前で、美しく流れる流星の下で、彼は、彼女は踊っている。自由に、何も隠すことなく踊っているのだ。まるで、驚きとよめく周りと、隔絶された空間にいるかのように。

少女は、黒く、長い髪を左右に揺らし、慣れないメイクで飾つた顔をほころぼせる。周囲の人々はそれぞれ、様々な動きをしていた。楽しそうに誰かに電話する人、子供の乗つたブランコを揺らす人、スマホをじつと見つめる人、ベンチに座つてうたたねする人。本当に様々だ。ただ、今、この瞬間だけは、皆取り繕うことなく、己のままに動いている。

そんな美しい世界で少女は踊る。見た目だとか、性別だとか、そんなものの関係なく、ただただ楽しく

踊る。周囲は皆、彼女の観客であるかのように。ふと夜空を見上げれば、たくさんの星々が、尾を携えて駆け回つていた。その中で、一際目立つ星が、明るく、強く瞬いている。

あの星が欲しい。少女はその輝きに心惹かれ、思わず手を伸ばした。でも、いくら手を伸ばそうとも、その輝きを掴める事は無く、ただ空を切るだけであつた。それでも、少女は心が踊つて仕方がなかつた。これは、初めて流星を見た、あの時とまるで同じだ。

ふと辺りを見やれば、少女の周りには、大勢の人が集まつてきていた。親子らしき人もいれば、学生であろう人もいた。皆、空を指さして、流れる星々に釘付けになつていて。少女もそれを眺めた。星と、その光景を。皆が星に夢中になつていて光景を。誰も、少女を一目見ようともしない。この中で、少女に「おかしい」なんて言う人は、一人もいなかった。

皆、本当は目の前にあることで精一杯で、周りを気にする余裕なんてないのだ。彼らにとつて私など、僕など、さほど重要な人物ではなく、ただの脇役に過ぎない。少女は、今更、そんなことに気づいたのか、と口元を緩めた。

観察と共に、少女は星を眺める。終わりの見えない星の群れを、ただただ黙つて眺める。それは、綺麗で、それでいて、とても懐かしさを感じた。ポーンポーンと、どこからか音が聞こえる。広場の時計の針は、二四時を指していた。そして、その音は段々と大きくなり、やがてビビビビツツという、けたたましい音へと変わつていった。

あるアパートの一室で、一人の男が目を覚ました。布団から上半身がはみ出ている状態で、右手にはスマホが握られていた。現在時刻は六時二分。今日は火曜日から、どうやら出社しなければならぬらしい。男は、深いため息をついてその重い体を起こした。テレビをつけ、インスタントのコーヒーを体に流し入れる。部屋には、まだ昨日の煙草の残り香が漂つていた。なんだか変な夢を見たな、と男が洗面台に向かうと、下に、小さなメモ帳が落ちて

ことに気が付いた。それは、自分が昨日引き出しの奥から見つけたもので、表には、「はくのかわいいものメモ」と書かれている。数少ない僕の、思い出の品だ。ページをめくつてみれば、なんとも拙い文字で、「うさぎさん」だの、「おみせでかつたシール」だのと、色々なものが、大雑把に記されていた。

昨日の自分はこれを見て、「懐かしさ」と思いつつも、「もう戻れないんだ」という悲しさがあつた。そんな憧れにも後悔にも似た感情も引きずつたまま、寝てしまったから「自分が昔のようになれる夢」を見たのだろうか。でも、なぜだろう。確かに、あの時にはもう戻れない。けれど、大人になつたつて、皆と違つたつて、無理に自分の気持ちを抑え込めなかつたつて良いという思いが、どこからか湧いてくる気がした。心の中に、昨日には無かつた、新しい風が確かに吹いているのだ。あの不思議な夢の中で、自分は、これが夢だと、薄々気付いてはいた。だつて、本当の自分はあんな堂々とドレスは着られないし、踊るなんてもつての外なのだから。でも、だからこそ、あの瞬間だけは自由でいられると思つていた。拒絶されることがない夢の中だけは、「ありのままの自分」でいて良いと思つたのだ。

でも、それは違つた。あの限られた時間でなくとも、好きに生きて良いのだ。好きに「好き」と言つて良いのだ。だつて、案外周りは、他人のことなど気にしてないのだから。男は、ふつと笑つと、そのメモ帳を机の上に乗せた。

六時四〇分。鏡の前でネクタイを整え、男は足早にアパートから出ていく。いつもと同じことをしているだけなのに、少し周りが新しく見える気がした。それは周りが変わったのか、はたまた男が変わつたのか。いずれにせよ、男の心の中で、あの時掴めなかつた星に似た輝きが、強く光り出していったのは、確かだつた。

男が出て行つた部屋の窓から、消し忘れたテレビの音が聞こえてくる。女性のアナウンサーの声だつた。「今日は、数十年に一回現れると言われている、流星群が見られる日ですね。専門家によると、夜の七時辺りから見る事ができ——」。

「今日は、数十年に一回現れると言われている、流星群が見られる日ですね。専門家によると、夜の七時辺りから見る事ができ——」。

# 短歌部門

【最優秀賞】	富山中部高等学校	2年	伊東はるな	電子辞書にはない世界……………40
【優秀賞】	富山中部高等学校	2年	稲垣 英里	悪ふざけだけど確かに……………40
	富山中部高等学校	2年	糸谷 志陸	「あんな、白って200色……………40
【佳 作】	高岡第一高等学校	2年	戸石 義崇	夏休みの最終日の……………40
	南砺福野高等学校	2年	柴田 莉緒	七年間諦めた夢……………40
	高岡第一高等学校	1年	篠原 蒼侑	海越しの立山連峰……………40

## 【参加作品】

富山東高等学校	1年	鷺 平 桃 音(2首)	高岡第一高等学校	2年	上 田 佳 音(3首)
富山中部高等学校	2年	伊 東 はるな(2首)	高岡第一高等学校	2年	橋 左 近(3首)
富山中部高等学校	2年	糸 谷 志 陸(2首)	高岡第一高等学校	2年	戸 石 義 崇(2首)
富山中部高等学校	2年	稲 垣 英 里(2首)	高岡第一高等学校	1年	東 貴 麗(3首)
高岡南高等学校	2年	廣 岡 伸 朗(3首)	高岡第一高等学校	1年	稲 葉 琉 月(1首)
南砺福野高等学校	2年	柴 田 莉 緒(1首)	高岡第一高等学校	1年	長 田 陽 葵(3首)
富山第一高等学校	1年	田 村 百 珠(3首)	高岡第一高等学校	1年	河 合 悠 太(1首)
龍谷富山高等学校	3年	柳 瀬 みらい(3首)	高岡第一高等学校	1年	嶋 莉 世(1首)
龍谷富山高等学校	1年	飯 田 葵(1首)	高岡第一高等学校	1年	古 瀬 優(3首)
龍谷富山高等学校	1年	篠 村 光 星(1首)	高岡第一高等学校	1年	宮 下 那 月(3首)
龍谷富山高等学校	1年	田 村 美 來(1首)	高岡第一高等学校	1年	吉 田 智 哉(3首)

【最優秀賞】

富山中部高等学校 二年 伊東 はるな

電子辞書にはない世界

三限後私はイーハトーブへ行つた

【佳作】

高岡第一高等学校 二年 戸石 義崇

夏休みの最終日のアフタヌーン

ダイアナ悼む大輪のバラ

【優秀賞】

富山中部高等学校 二年 稲垣 英里

悪ふざけだけど確かに触れていて

恋は暗転しないエチュード

七年間諦めた夢もう一度

夏の終わりの科目選択

富山中部高等学校 二年 糸谷 志睦

海越しの立山連峰美しく

「あんな、白って2000色あんなん」

避難訓練 制服のシヤツ

カメラ構えて「べるもんだ」待つ

高岡第一高等学校 一年 篠原 蒼侑

## 俳句部門

【最優秀賞】	富山中部高等学校	2年	谷井 円	カルピスの……………	48
【優秀賞】	富山第一高等学校	1年	白石 穂高	寄せる波……………	48
	高岡第一高等学校	2年	橘 左近	二次試験……………	48
【佳作】	高岡第一高等学校	1年	宮下 那月	日没や……………	48
	氷見高等学校	1年	上坂 侑璃	初虹や……………	48
	高岡南高等学校	1年	川原 宏太	蟬の殻……………	48

### 【参加作品】

富山東高等学校	3年	寺本 光希 (1句)	龍谷富山高等学校	3年	柳瀬 みらい (2句)
富山東高等学校	1年	源甲斐 みのり (1句)	龍谷富山高等学校	2年	古川 結花 (1句)
富山東高等学校	1年	田村 麻央 (1句)	高岡第一高等学校	2年	橘 左近 (2句)
富山東高等学校	1年	仲井 穂華 (1句)	高岡第一高等学校	2年	戸石 義崇 (3句)
富山東高等学校	1年	宮本 怜奈 (3句)	高岡第一高等学校	1年	東 貴麗 (1句)
富山中部高等学校	2年	谷井 円 (2句)	高岡第一高等学校	1年	稲葉 琉月 (3句)
高岡南高等学校	1年	川原 宏太 (2句)	高岡第一高等学校	1年	片田 有哉 (1句)
高岡南高等学校	1年	明道 焯 (3句)	高岡第一高等学校	1年	栗原 心愛 (3句)
高岡南高等学校	1年	眞部 朋季 (3句)	高岡第一高等学校	1年	篠原 蒼侑 (1句)
氷見高等学校	1年	上坂 侑璃 (2句)	高岡第一高等学校	1年	鈴木 咲人 (1句)
南砺福野高等学校	2年	柴田 莉緒 (1句)	高岡第一高等学校	1年	古瀬 優 (3句)
南砺福野高等学校	1年	天野 世那 (3句)	高岡第一高等学校	1年	宮下 那月 (2句)
南砺福野高等学校	1年	長澤 諒祐 (3句)	高岡第一高等学校	1年	渡 叶望 (3句)
南砺福野高等学校	1年	吉本 那智 (3句)	星槎国際高等学校	3年	平柳 翠沙 (1句)
富山第一高等学校	1年	白石 穂高 (2句)			

【最優秀賞】

富山中部高等学校 二年 谷井 円

カルピスの女優の声で昼寝覚む

【佳作】

高岡第一高等学校 一年 宮下 那月

日没や今日という名の葉が落ちる

【優秀賞】

富山第一高等学校 一年 白石 穂高

寄せる波爪先から夏さらう

高岡第一高等学校 二年 橘 左近

二次試験人いっばいの雪積もる

氷見高等学校 一年 上坂 侑璃

初虹や出会いの季節がはじまるね

高岡南高等学校 一年 川原 宏太

蝉の殻触れないのは僕だけか



## □ 編集後記 □

第35回富山県高等学校文化祭「文芸作品展（第23回）」の作品集に、県内の高校生の皆さん80人による散文13篇、詩15篇、短歌23首、俳句29句の創作作品に加え、部誌部門へは4誌の応募をいただきありがとうございました。

今年は9月16日（土）・17日（日）に、富山県教育文化会館を会場として、第24回北信越高校生文芸道場富山県大会が行われました。県内外から約80名の生徒の参加があり、文学散歩や生徒交流会、散文・詩・短歌・俳句の各部門に分かれての部門別研修会を通して、創作の楽しみを味わうとともに、文芸交流の輪を広げることができました。

今回作品展に寄せられた作品は、北信越高校生文芸道場で講師の先生や参加者から出された意見を受けて、より磨き上げたかたちで提出されたものも数多くあります。この作品集に収められている力作の数々を味わいながら、創作力にさらに磨きをかけてほしいなと思います。

最後になりましたが、文芸作品展にご応募くださいました学校関係者のみなさまをはじめ、作品選考にあたっていただきました先生方、文芸専門部の各先生方に感謝申し上げます。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

令和5年11月

編集委員 菅田智雄

### 文芸作品展選者

【散文】立野幸雄氏（元富山県立図書館長）

【詩】櫻井仁見氏（高校教諭）

【短歌】早川晃央氏（富山大学教育学部附属中学校教諭）

【俳句】森川敬三氏（富山県現代俳句協会事務局長）

## 令和5年度 県高文祭参加 文芸作品集

発行日 令和5年11月10日

編集担当 南砺福野高等学校 小西千鶴

### ■編集・発行

富山県高等学校文化連盟文芸専門部

〒930-0097

富山県富山市芝園町3-1-26

富山県立富山中部高等学校内

TEL 076-441-3541

FAX 076-441-3543

### ■印刷

大栄印刷株式会社

〒939-8232

富山県富山市南央3-41

TEL 076-429-7080

FAX 076-429-4982